

台湾の選挙

—その熱狂と民主主義の行方—

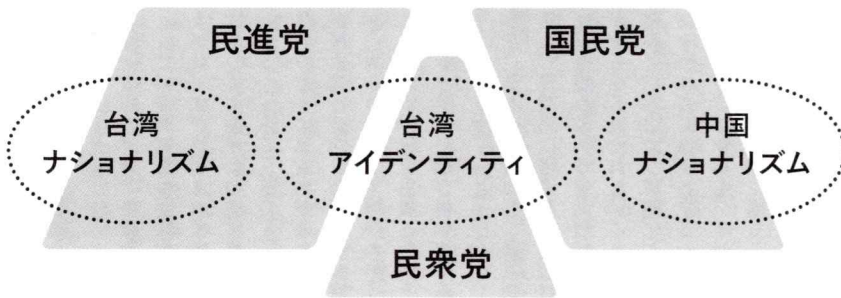
2024年選挙結果

2024年1月、台湾で総統選挙が行われた。結果は、民主進歩党（以下、民進党）の頼清徳氏が当選（得票率40・1%）、中国国民党（以下、国民党）の侯友宜氏が2位（得票率33・5%）、そして、台湾民衆党（以下、民衆党）の柯文哲氏が3位（得票率26・5%）であった。民進党が民主化後初めて3期連続で政権を担うことになり、国民党は総統選挙で3連敗となった。

ところが、同時に行われた立法委員選挙（国会議員選挙に相当、定数113）では、与党民進党が前回から10議席減らして51議席となり過半数を失った。一方、国民党が前回から14議席増やして52議席を獲得、1議席差であるが民進党を上回り比較第一党になった。さらに、民衆党が議席数はわずか8であるがキャスティングボートを握り、今後4年間立法院で存在感を示すことになった。

このように、今回の選挙結果は3党それぞれに「勝ち」と「負け」が生じ、今後4年間の台湾政治は、行政院は与党が主導するが、立法院は野党が多数の「ねじれ」となった。これは全体としてみれば、台湾の有権

台湾のイデオロギーと3政党の立ち位置



〔筆者作成〕

者のバランス感覚が現れた結果である。台湾では歴史的に強圧的な統治を経験し、1つの政党、1つの政治勢力が強大化するのを嫌う傾向がある。また、政権が長期化すれば腐敗・非効率が悪化し、権力が肥大化しかねないという警戒感もある。そのため、民主化後の台湾では、きれいに2期8年で政権交代を繰り返してきた。

台湾の政党構造

民進党と国民党の二大政党は、大きく分けると「台湾ナショナリズム」と「中国ナショナリズム」を基盤にしてきた。両党のコアの支持者の投票傾向は決まっている。中間派の票の獲得が重要なのは他の民主主義諸国と同じだが、台湾の場合、中間派は次第に「ゆるやかな台湾アイデンティティ」の色に染まってきた。それゆえ長期トレンドとして民進党の党勢が拡大、国民党の党勢は衰退する流れができた。また、米中対立という国際政治の構造も民進党に有利に作用した。台湾社会は親米世論が強いので、アメリカとの連携強化を掲げる民進党のほうが、中国との融和を掲げる国民党よりも中間派の支持を得やすかった。

その流れによって民進党は2016年の



小笠原 欣幸（東京外国語大学名誉教授）

台湾政治研究者、主な著書に『台湾総統選挙』見洋書房、2019年。台湾の選挙区を歩き、政治家・有権者に直接話を聞く調査を続ける。選挙予想の精度が高いので「台湾メディアで『選挙の神様』と呼ばれている。趣味は台湾のカフェめぐり。好きな食べ物は台湾のルーロー飯、小籠包、マンゴー、パイナップル。

総統・立法委員選挙で圧勝、2020年も圧勝し、8年間行政と立法を握ってきた。仮に今回も圧勝すれば、民進党の権力がさらに強まると見られていた。ここに割り込んできたのが民衆党の柯文哲氏である。民衆党は4年前に結成された新しい政党だ。4年前柯文哲は出馬しなかったが、立法委員選挙の比例区で5議席を獲得した。同党の支持者は、4年前は多くが蔡英文氏に投票したと見られている。

柯氏のイデオロギー的ポジションは「ゆるやかな台湾アイデンティティ」である。二大政党体制の打破が持論で、統一独立論争から距離を置いている。その前提は、自由で民主的な台湾の中華民国体制の現状維持である。柯氏は選挙戦のプロセスで政権交代を訴えたが、単独で勝つのは難しいとみて、次第に国民党との野党連合に傾いた。もともと民進党と盟友関係にあった柯氏が反民進党の旗幟を鮮明にしたのだ。このため、政権交代を訴える野党の発信力が増した。

柯氏の登場は、民進党に不満があっても国民党には入れたくないという有権者に新たな選択肢を提供する意義があった。同時に、民進党の基盤を弱める役割を果たした。

台湾の政治構造は二大政党制から三政党制に向かう入口に来たといえる。

バランス投票

これまでの慣例に従えば、今回は政権交代が起こる選挙であった。しかし、台湾の有権者の相対多数は蔡英文路線（アメリカとの関係を強化して中国の武力行使を抑止する路線）の継続を掲げる頼清徳氏を支持した。確かに野党は2候補の得票を合計すれば過半数を超えるが、どちらかの野党が民進党を上回る吸引力を持たなかったのも事実である。

一方、立法委員選挙では民進党が議席を大きく減らした。これは、激戦区の一部有権者の間で、頼氏が当選するのは仕方がないが民進党に再度過半数を与えたくないという心理が働いたからである。激戦の選挙区では複雑な投票行動が発生した。総統は頼氏に入れながら立法委員の選挙区では国民党候補に入れたり、総統は柯氏に入れた人が選挙区で国民党候補に入れたり、あるいは、4年前は選挙区で民進党候補に入れた人が今回は泡沫候補に入れることで結果的に国民党候補の当選を助けたり、といったことが発生した。これがバランス投票の実態なのである。

台湾の選挙は楽しい

台湾の選挙が盛り上がるわけ

台湾の選挙がにぎやかで毎回盛り上がることは日本でも知られている。特に選挙戦最終日の大集会は日本から多くの報道陣が

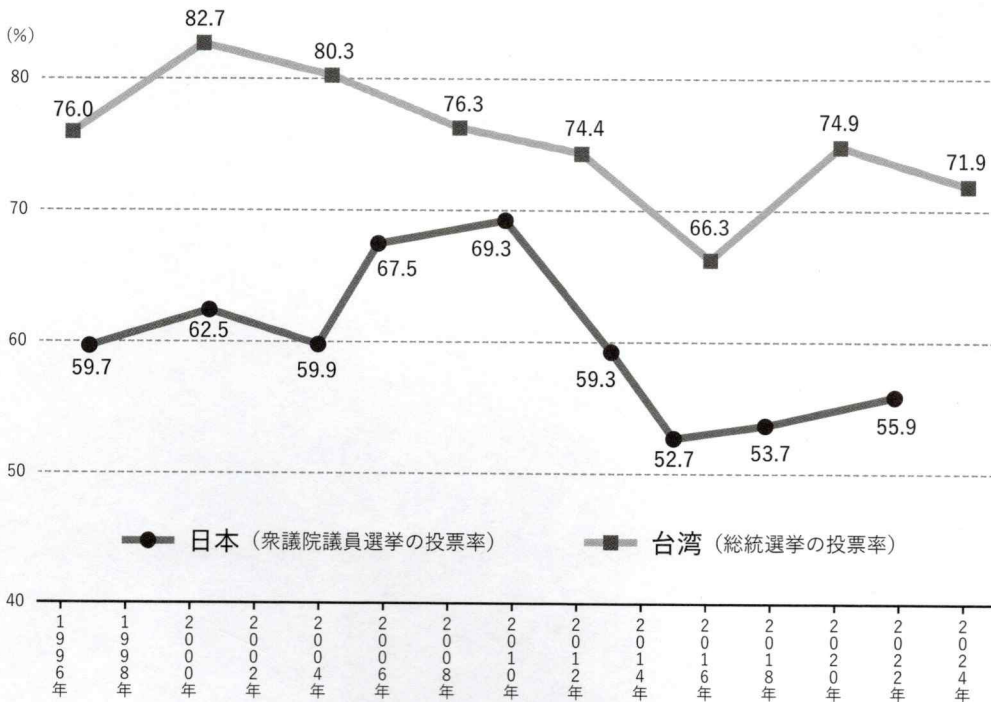
取材に訪れ、その光景を映像で見た人も多いだろう。

選挙で興奮することの少ない日本人が台湾の選挙を見たならば、誰もがその熱気に驚かされるに違いない。雨が降ろうと風が吹こうと選挙集會に何千人何万人もの人が集まり、演説に耳を傾け拍手喝采を送る。選挙でなぜこれほど熱くなれるのか？この熱気の正体は何なのであろうか？

台湾全土が熱気に包まれるのは言うまでもなく総統選挙である。しかし、県長（知事）・市長を選ぶ地方選挙もそれに劣らず大変な熱気と興奮を巻き起こす。台湾の総統選挙や地方の県市長選挙は、次の4年間の政権運営を誰に託すかという選択に止まらず、異なる社会勢力間の力比べという性質ももっている。異なるアイデンティティ、エスニック・グループ、各地の地方派閥間の勢力争いという複数の次元の要素が混じり合い、非常に複雑なプロセスを経て当選者が決まる。

政治は政（まつりごと）という言葉があるが、選挙はまさに壮大な祭りのような様相を見せる。御輿を担ぐ人が多ければ見物人も多くなるし、勢いよくパレードをしていると列に加わる人もどんどん増えてくる。政策論争は確かに存在するが、その比重は小さい。御輿の担ぎ手は相手の御輿よりも自分らの御輿のほうが立派だという優越感を抱き、相手の御輿の悪口を言う。言われた側は自分たちの集団全体が侮辱されたと感じ、敵意を募らせ、非難合戦はエスカレートしていく。ネガティブキャンペーン

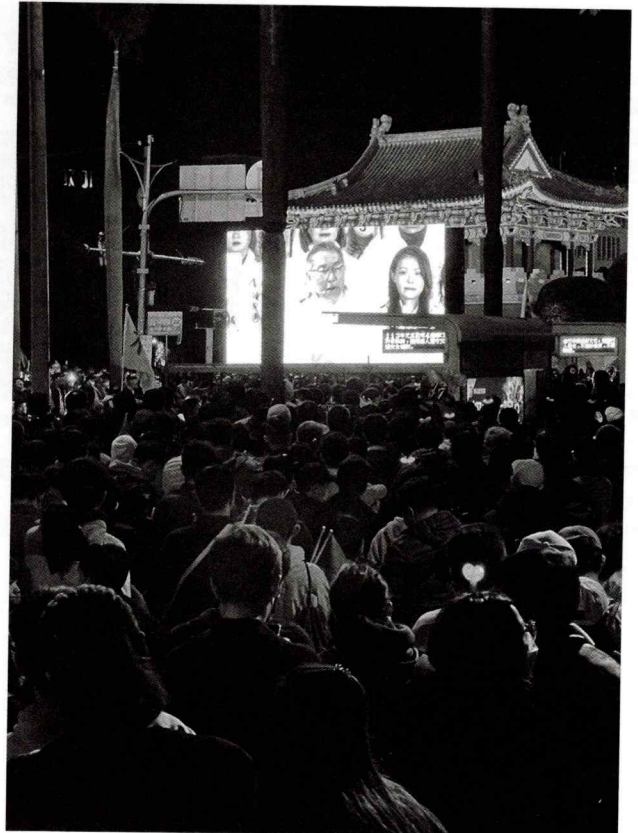
日本と台湾の投票率の推移（1996年以降）



〔筆者作成〕

んだ。見物人も感情を揺さぶられ、どんどん担ぎ手の列に加わる。

選挙情勢は投票日に向けて日々変化し、勝敗は最後までわからないことが多い。自ずと興奮は高まる。双方の御輿の列がにらみ合い、どちらの人数が多いかを競い合う（例えば、嘉義市では本当にこのような光景が出現する）。その人数を見て勝ち馬に乗ろうとする人も出てくる。投票前夜の選挙集会では、支持者は自分たちの代表である候補者の勝利を信じ、祈り、必死で声援を送る。選挙という大きなまつりごとの中で、候補者と支持者の一体感、そして、信じる者同士の高揚感の相乗作用が台湾の選



柯文哲陣営、選挙戦最終日の集会の様。模。

挙の熱気の正体である。

若者に人気の第三勢力

台湾総統選挙が直接選挙方式になったのが1996年で、今回が8回目となる。私は8回の選挙すべてで各候補の選挙活動を見てきた。いちばん印象に残っているのは2000年の選挙戦最終日の陳水扁氏の大会であった。集まった人々が皆、陳氏の当選を確信して喜びを爆発させた、そんな一夜であった。

場所は台北市のサッカースタジアム。現場を見た自分のメモには「中が10万人、外も10万人くらいいたのではないか。これほ



どの人を見たのは初めて。今回の陳水扁ブームを象徴する高校生と小さな子どもがやはりたくさん来ていた。そしてみな楽しそうであった」と書いてある。

それは本当に変革の地鳴りであった。翌日の投票で陳水扁氏が当選、台湾で初めて選挙による政権交代が実現した。投票率は実に82.7%、台湾総統選挙史上最も高く、今後も破られることはない記録だ。

その後、台湾でも民主化が落ち着き、西側民主主義諸国と同じように、投票率は次第に下がる状況にあった。選挙集会はだんだんと洗練され、自分たちが支持する候補・陣営を盛り立てるためのプロデュースが施され、演出が感じられるようになった。それはそれで楽しい。やはり日本では想像できない選挙集会がそこにはある。今回も投票率は70%の大会を超える72%であった。

今回、柯文哲陣営の選挙戦最終日の集会は驚かされた。体感ではあの2000年の陳水扁以来、実に24年ぶりの盛り上がりであった。選挙で支持する候補がいてうれしくてたまらない、それを他人と分かち合いたい集団がいた。総統府前の道路と周辺の幹線道路が歩行者天国になり、多分10万人の参加者がいたであろう。前日に柯氏は支持者とツーショット写真を撮る流れ作業の撮影イベントを行ったが、そこにも長蛇の列ができた。若い世代を中心にブームをつくり出したことが現場で確認できた。

しかし、結果は、柯氏は当選からは遠い3位であった。陳水扁並みの熱狂をつくり出しながら、陳水扁にはなれなかった。柯



氏は世代別の支持率が極端な差があり、若者世代での支持率は50%を超える圧倒的な人気を擁しながら、60歳以上の高齢者世代では支持率が1桁しかない。「変人」キャラで「既成政党体制をぶちこわそう」と語る柯氏は、若者にとって政治を身近にし期待を投影できる存在である。だが、年長者からすると、「口先だけで信用できない」となる。台湾社会は若者の発信力が強いが、これだけ世代差があつては当選争いに加わるのは難しい。

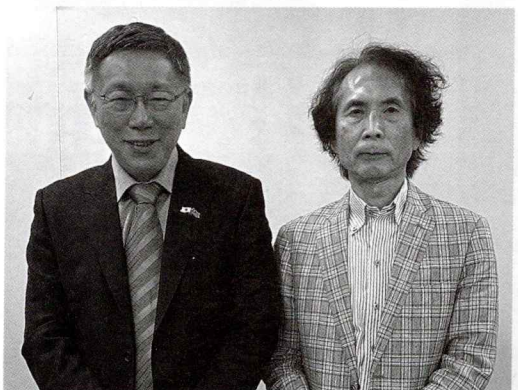
柯氏に期待する若者は、外交・安全保障や対中政策への関心よりも、都市部のマンション価格の高騰、若者の賃金の低迷といった内政への関心が高かった。柯氏の支持者も台湾への愛着、あるいは中華民国台湾への愛着は強い。彼らの中で一国二制度に

よる中国との統一を支持する人はまずいないだろう。今回の台湾の選挙結果を解釈する際に忘れてはならない点だ。

日本の隣の民主主義

台湾の有権者は今回の選挙で3党に「うまくやってね」という宿題を与えたと見える。しかし、台湾の政治制度からして、行政と立法の「ねじれ」によって政治がマヒするリスクも大きい。それは台湾の統一を狙う中国にとって、つけ込む「隙」ができることを意味する。

中国はさまざまな方法で「選挙は台湾に混乱をもたらすだけ」というディスインフォメーションを発信している。台湾の法律に違反して、特定の候補・政党への支持/不支持を働きかけた疑いもある。世界の民



上から、頼清徳、侯友宜、柯文哲の各氏と筆者。候補者との写真撮影の際には、筆者の表情が有権者の投票行動に影響を及ぼすことがないよう、あえて無表情で中立を保っている。

主義諸国を見ていてわかるように、民主主義自体が多くの問題を抱えている。台湾も同じだ。民主主義をより深化させたいという台湾の有権者の意識は、おそらく日本よりも強い。だが、台湾は外部勢力によって常に民主主義を否定する圧力にさらされている。

日本の隣の民主主義の営みを見守ってきたい。今回の選挙で中国が反対している「台湾独立」を公約に掲げた候補は1人もいない。統一を拒否すれば「独立派」と見なすのが今の習近平主席の路線だ。台湾側は中国との統一はいやだといっているだけで、十分抑制している。中国は、台湾の選挙結果を受けて話し合いに応じるべきだ。台湾の総統選挙がこの先も続いていくように国際社会もサポートしていきたい。